●人権教育推進会議情報誌●

はじけるこころ

vol.6

人権の宝島・箕面小発
見る・聞く・知る、そして感じ・考えることからはじまる平和教育……1

講演：学ぶ力をつけるためには　鍋島祥郎……3

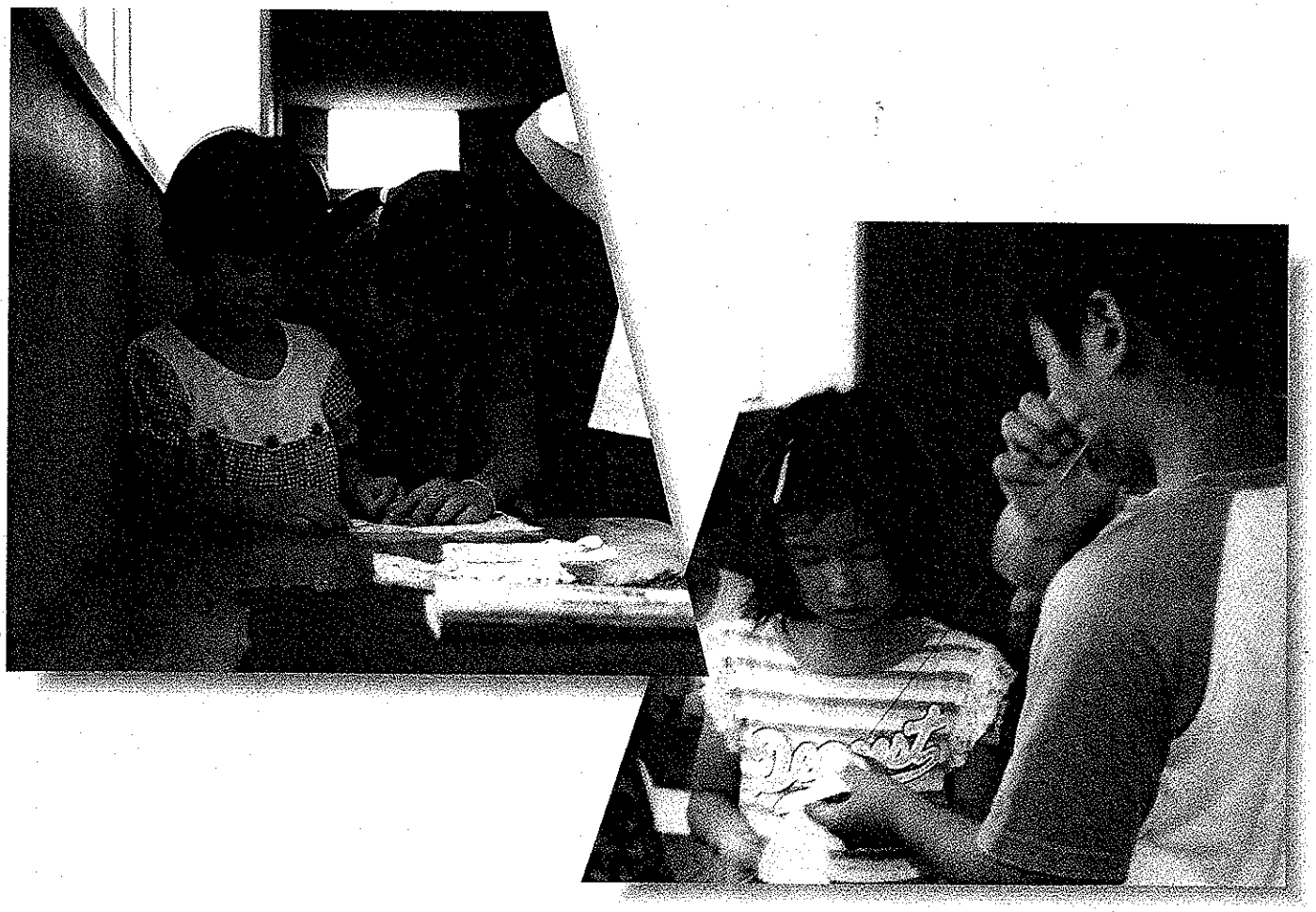
豊川南小学校6年生平和教育カリキュラム紹介……7

「ジンギ」なき、かけっこ　かわのひでただ……9

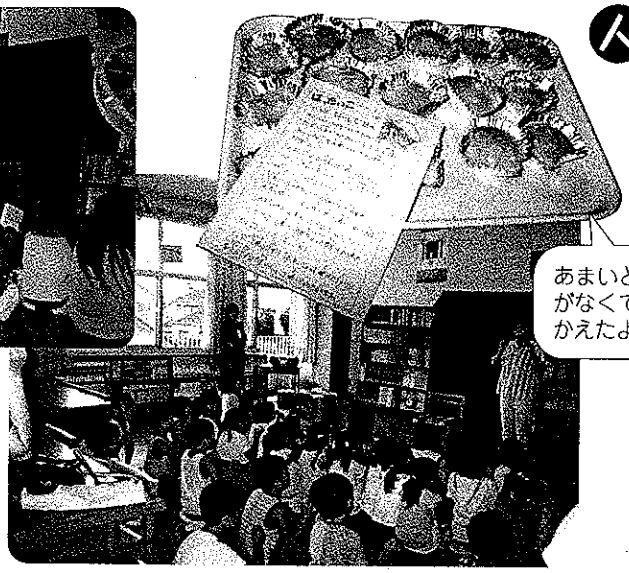
ゆうからきいて！……11

人権教育基本方針解説……14

げんげののぺぇじ……15



みのおから世界へ！　人権文化の花束を！



はったいこで
作ったおやつ

あまいと思ったけど味がなくて、のどにつっかえたよ。

平和教育

[なかよし]戦時中の生活

もんぺや防空ずきんを着たり、戦争中のおやつを食べたりして、老人会の方から、当時の様子を聞いていた子どもたち。

ふとんをかぶっているみたいで、暑くて暑くて、もう大変！！

[校長室]戦争体験談 1

千人針や軍隊の体験談を聞きました。

[2階廊下]ヒロシマ・ナガサキパネルの展示

熱心に見入る子どもたちのなかには、パネル写真に手を合わせている子も…

何を祈ったの？

・・・・・

[会議室]戦争体験談 2

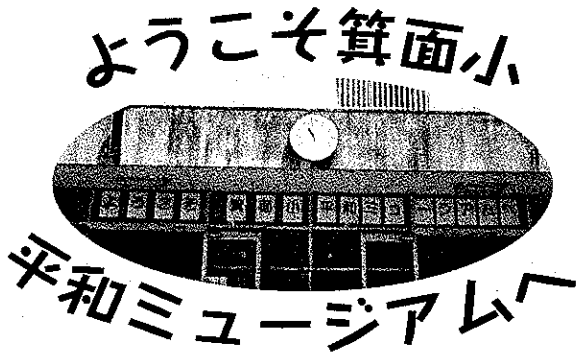
戦時中の箕面小の墨ぬりのことや、校区の出来事などのお話が聞けました。

＜見学の感想＞

多角的に見たり聞いたりすることで戦争について考えてみよう、より多くの事柄に触れることで平和について考える力を育てよう、というのが「平和ミュージアム」の意図するところだと思います。総合学習などで子どもたちが自主的に取り組んだ平和問題を、発表する場としてのコーナーなどがあれば、さらに充実するのではないでしょうか。

「平和」は、戦争体験のない私たち（子どもたちには尚更）にとって、実感しにくいテーマなので、自ら調べ発表する能動型の学習が重要だと思います。子どもたちの様子を見つつ、そう感じました。

人権教育推進会議委員　　服部ひとみ

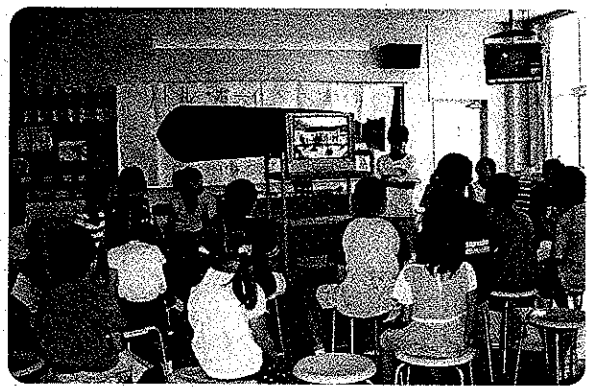


[図書館]お話会平和バージョン

「世界が一つになるまで」の手話をまじえた歌ではじまり、平和・戦争に関連した内容の「爆弾と将軍」「こいぬがうまれる」「じゃがいもかあさん」3冊の本の読み聞かせがなされていました。

低学年から高学年まで、話を聞きながら、家族や命のぬくもりを感じとっていました。

'03.8.6 見る・聞く・知る、そして 感じ・考えることからはじまる



[体育館]ビデオ1（高学年向き）「はだしのゲン」

戦後をたくましく生きるゲンと一体となって、子どもたちは暑さを忘れて食い入るように見ていました。

[被服室]ビデオ2「修学旅行」

平和公園や大久野島での平和祈念式などの様子が紹介されていました。

平和学習で学んだことを自分の言葉で伝える6年生。来年は、君たちが伝えてほしい。

[多目的室]ビデオ3（低学年向き）「おこりじぞう」

広島に原爆が落とされたとき、町角に立つ「わらいじぞう」は、怒り顔になって涙を流す。

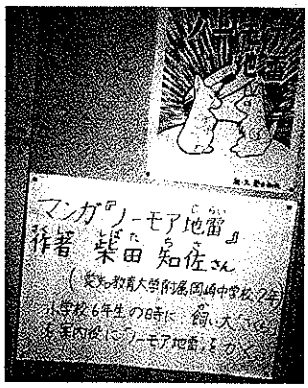
その悲しみと怒りは、小さな子どもたちの顔にもあらわれ、こころに伝わっていました。

[コンピュータ室]平和を考えよう

世界では今も戦争が続いています。子どもたちにとっては、今の現状から平和について考える機会になりました。

[絵画室]地雷コーナー

カンボジアの地雷の現状の写真が展示され、地雷撲滅キャンペーンのビデオが流れていました。



2003年度箕面市教研・人研・外教合同夏季一日研究会"学力保障Ⅰ"分科会

講演：学ぶ力をつけるためには～子どもの実態からのアプローチ～

講師　大阪市立大学人権問題研究センター助教授　鍋島祥郎

八月一日（金）箕面文化センター8階大ホールにおいて開催した"学力保障Ⅰ"分科会は百名を越える参加者で大盛況でした。以下にその概要を報告します。

1.誰の学力形成がはばまれているのか…学力不平等の構造

大学生の頃、同和地区の子ども会活動に関わったのがきっかけで、学ぶ楽しさを知らない子どもたちが学ぶことから逃げていたのを目の当たりにしました。今の子どもたちの学ぶ力は確実に減少しています。逆に、教える力の低下した学校はますますしんどくなってきています。

そこで、三重県の高校3年生2千人に調査を行い、〈地区内・地区外〉〈父親の学歴が大卒かそうでないか〉で様々な視点でクロス集計・分析しました。

←

○保護者の学歴の低さは子どもの学歴の低さに世襲して表れています。

○進学資金の貯蓄率が低く、いざというときに資金を調達できない家庭が多い。また、日本育英会の奨学金では不足するので進学を断念せざるを得ない、よって、学歴が低くなる。

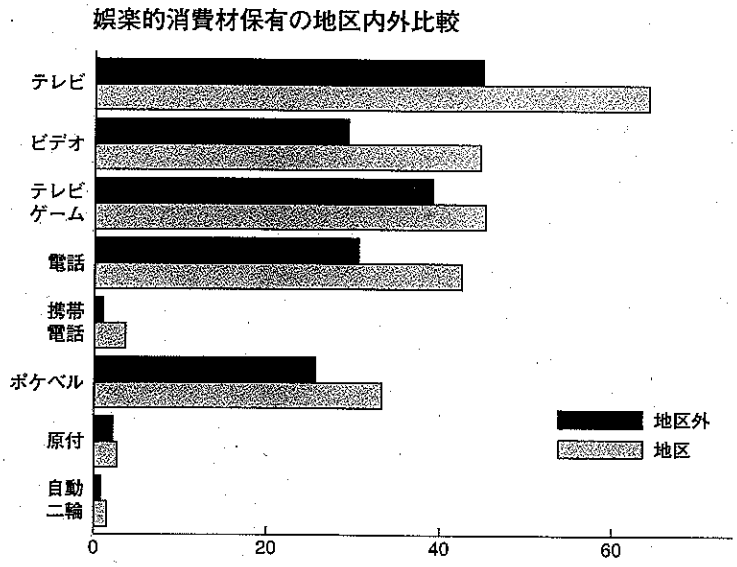
○一方でテレビ・ビデオ・ゲーム・携帯電話を買い与える率は地区の親は高い。

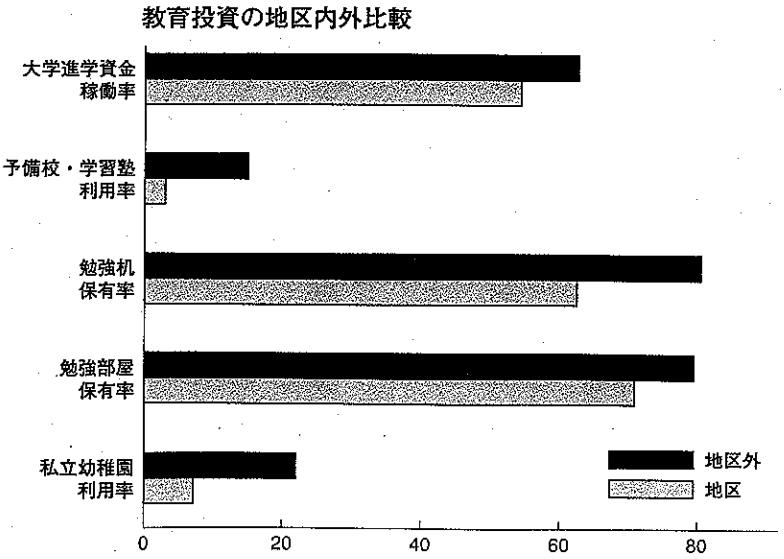
○ものを買い与えられる率の高い子どもは「享楽志向」を示します。

（享楽志向＝

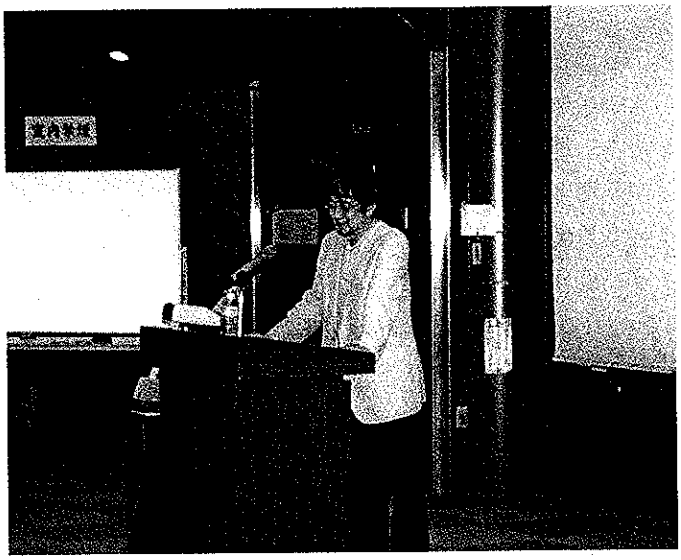
Q、どんな仕事がしたいか、に対して

A、仕事をせずに遊んで暮らしたい、と答える生徒）





○50年前は家庭環境によって不就学が多かったが、今は、貧しくていらいらするのではなくて、目先の楽しみを得るためにむちゃくちゃする。
（『ハイスクール白書三重』大阪市立大学人権問題研究センター、2000）



2.誰の学力が低下しているのか …学力低下の実相

東大の学力プロジェクト関西調査の結果から、「分数のできない大学生」とマスコミが派手に取り上げたのが学力低下論争の発端でした。

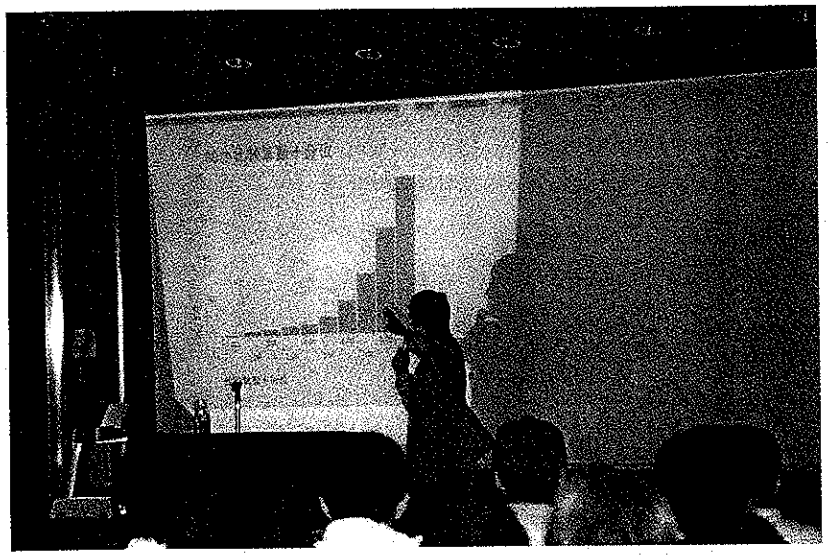
一九八九年と二〇〇〇年に小学校5年生に同一校同一問題をさせた結果、九十点台の子どもが激しく減りました。その代わりに三十点台の子どもが増えています。（これを「ふたこぶらくだ現象」といいます）

○部落の子どもたちの学力減少速度が大きい。これによって学力格差が拡大しています。
○学ぶ意欲が落ちて学力は結果として落ちた。
○宿題を全くしない子の比率が八九年（十・二%）から00年（三二・五%）へと増加しています。ますます授業が成立しない要因が増えていることになります。
○前日に学校の用意をする子の比率は八九（五五・八%）年から〇〇（三二・五%）年へと減少しています。

3.経済の変化が子どもの学力に影響を…

八五年当時、高度経済成長時代、受験戦争も激烈で人生は右肩上がりでした。当時大学進学率は五十%、現在は六十五%、それほど努力しなくても大学いけるようになってきました。しかし、高校に行けない子どもの数は二～三%、おそかれ早かれ学歴主義は終わります。そんな学ぶ力のデフレの時（「意欲のデフレ現象」）に文部科学省はデフレを促進するようなゆとり政策を実施してしまいました。経済の変化が子どもの意欲と学力に影響を及ぼすようになってしまいました。それによって、しんどい家庭の子どもたちの学力は下がっています。

こんな時代の方法とは……？
・教える時間の確保
・学校は大変な状況と地域に呼びかけ、協力を得る（すこやかネットで）。
・保護者、市民の関わりを得ながら授業改革の発想を



・担任の個人的な力量に任せることなく、ベテランの力量も通用しない場面もあり、組織としての実践力の向上を
・若手のスキル不足（人間関係のスキル）の解消に向けた各種研修

4.効果のある学校（エフェクティブスクール）とは…

学力不平等と有効に闘っている学校があります。私たちはそれを「エフェクティヴ・スクール（効果のある学校）」と呼んでいます。

それは、家庭環境に関わらず子どもの学力が向上している学校であり、マスタリー率（学習内容の７割を習得）の高い学校であり、校長のリーダーシップが発揮されている学校であり、教職員のまとまりのある学校であり、教員が差別的（例：答のわかってそうな子どもばかりをあてる）でない学校であり、子ども一人ひとりに的確なアドバイスができる学校である。

※英、米における「エフェクティヴ・スクール論」
（鍋島祥郎『効果のある学校：学力デフレを乗り越える学校づくり』解放出版社（近刊））

大阪にそんな学校があります。その学校の子どもの宿題をやってくる率は九十％だそうです。なぜそうなるかというと、その学校の宿題は適切な量と個に応じた課題になっているからでしょう。また、家庭での勉強時間は１・５時間というデータが出ました。それは保護者中心に家庭学習運動が展開されたからとも聞きます。

5.このような状況の中でどう改革をすすめるのか…

ポイントは

1.地域の協力を取り付けること。つまり、授業改革にボランティアやゲストティーチャーとして保護者、市民をとりこむことです。
2.明確な目標の設定（それは目標を数値化すること）と、結果の測定
3.教職員集団のチーム力向上のための方策を展開すること。まずは、現場の実態、問題意識を共有すること。（強制ではない）問題解決のために包括的方策を共有すること、問題解決への次のステップを絞り込むこと、協働で実践をすすめることです。

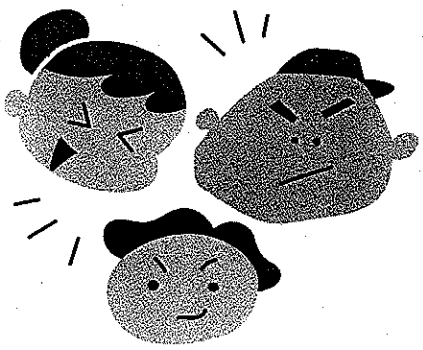
※立田慶裕・鍋島祥郎編『勉強せえ』日常出版（２００３年）

6.授業改革の方法論…

・カリキュラムの個別化
限られた教員の数で、個々の子どものニーズにどこまで対応できるかというチャレンジ（T.T.やプログラム学習、小集団学習などの組み合わせ、多様な指導方法のストックと開発）

・カリキュラム効果の増大
たとえば、着ぐるみの活用で授業に集中させる〈算数の仙人の登場〉

・カリキュラムの総合化
学ぶことに意味を与える。学んだ知識や経験を統合させる。



以上、アッと言う間の２時間の講演でした。鍋島先生が深く関わっていただきながら多くの市民と教職員と行政で作り上げた箕面市人権教育基本方針。その中で、学力とは、「政治・経済・文化のあらゆる場面で社会に主体的に参加しようとする力」と規定しています。この力を学校教育において保障することが学力保障です。

次に参加者のアンケートを紹介します。

顕著に見られる意欲のデフレ現象（人権教育推進会議委員の感想より）

我が子の実態を見透かされているようで、切実な思いで聞き入っていました。塾や学校の補充学習で成績は上がりますが意欲が向上しているとは限りません。学ぶことの楽しさはテレビゲームの楽しさを凌駕すると思いますが、それに至るには意志と根気が必要です。

「学ぶ力」をつけるためには親が共に考え応援すること（人権教育推進会議委員の感想より）

「学ぶことがおもしろい」と感じれる環境をつくるために大人ができることは何か。それは親の学歴なのではなく、安易にものを与えることで愛情を代弁させないこと。家庭の共感と協力姿勢がすごい力になる。小学生の時の家庭学習運動が今実ろうとしているという布忍小の現保護者の話は心強い希望を与えてくれました。

エフェクティブキンダーガーデンを考えたいと思います。地域と連携しながら保育実践していますが、考え方のずれが職員の中にあったりします、今日、改めて聞いて納得しました。小中学校と幼稚園は確かにちがいますが、取り入れるべきところは山ほどありました。がんばりたいと思います。（幼稚園職員）

20年前に北芝の子どもたちと過ごし、見事に学びからするりと逃げていく姿から研究を進めてこられた鍋島さんのお話に、とても引き込まれてしまいました。学ぶ力を育てることの難しさ、しかし教える力を高めれば、学ぶ力も高まってくる。今日からまた、仲間とともにがんばっていきたいと思いました。（小学校職員）

誰もが相談に行けるような人間関係を求められるならどうすればいいのか
本当に困ったときにどこまで対処してもらえるのか

（“在日外国人教育”分科会に参加した人権教育推進会議委員の感想より）

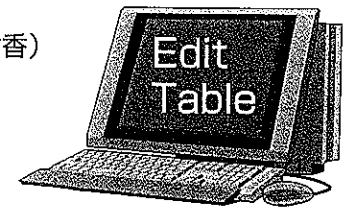
私たちに向き合っている側の立場の人が気を使いすぎて、「ちがい」があることが『普通』だと認識してくれない。「ちがい」があることを『珍しい』とさえ思っておられるように見えたりします。在日同胞は名前が二つあっても普通で、本人が選択できればいいことだし、二つともが自分なのです。だからこそ安心して暮らせるということがすごく大切なことなんです。

やっぱり教師っていう職業はすごいなあと改めて驚きました

（“人権・部落問題学習”分科会に参加した人権教育推進会議委員の感想より）

この分科会では多様性教育入門ということで「自分のアイデンティティを考え、自分と他者との多様性に目を向けるきっかけをつくる」ワークショップがなされました。その中で、『自分のアイデンティティをつくる要素の中で一番よりどころとなるものは何か。』という質問があり、「仕事」すなわち「教師」と答えた人が13人中10人いたことに驚きました。「やっぱり教師っていう仕事ってすごいなあ」って感じです。それがよい面（情熱を持っている）とちょっと危惧する面（自負心・一面的）を感じ、正直圧倒されました。（私は一市民であり、主婦として参加しましたので多様性を見つけるまではいきませんでした）

中村香）



※※言葉だけでなく写真や音声も貼り付けることのできる「カード」を複数はめ込む「パレット」をつくることで自分の伝えたい情報を編集するソフト

『古い・悲惨な広島』から『新しい・心温まる広島』へイメージチェンジ!!

12

提供）
on（討論）

りとりでを築く」

探し

ップ

ーマを決める
）

のごとをみる

の立場の人々が存
」を書くと同時に「ち
考えるか」という視点

被爆者援護会のボ
内にある様々な碑を
ていただいた。

12

Deepening（深化・探求活動）
Analysis（分析）

広島修学旅行

3つの宝物探し

↓

3つの宝物をまとめる※

↓

Edit Tableの使い方※※

↓

Edit Tableを使って編集

「もの・人・ストーリー」にこだわって見学する

見学するときに「もの」だけを見るのではなく、「もの」には関わる「人」が存在し、「もの」と「人」にまつわる「ストーリー」があるのでそのことに注意を促した。

＜Edit Tableでの編集＞
コンピュータの操作は慣れている子も多く、お互い教えあったりして、楽しく意欲的にEdit Tableの使い方を学ぶことができた。

10

Synthesis（統合）

発表の準備

↓

発表会（5年生に向けて）

↓

ふりかえる・感想をまとめる

編集とは

「見る」「さわる」「聞く」体験から「知る」「わかる」プロセスを経て人に伝えること

伝えるために

言葉・図形・動作
コミュニケーションを組み合わせる

↓

情報編集力

＜発表会＞
「難しかったけどがんばった」「戦争の悲惨さや平和の大切さをひしひしと感じた」「自分の考えをもてた」

豊川南小学校6年生平和教育カリキュラム紹介 （教諭：武樋保徳・野本淳子・山崎幸恵・

総合的な学習 生きる！ ヒロシマから未来へ

◆学習の流れと子どもたちの様子

組み立て 授業時数
＜ADIDAS＞

総合的な学習の時間

原爆投下から60年近くがたち、被爆体験の風化が懸念されたり、広島を訪れる子どもたちの無関心ぶりが新聞報道されていたりする。一見戦争とは縁がなさそうな日本で生活する私たちにも、世界各地での戦争や内戦、テロという現実が否応なしに突きつけられる。このような状況の中で「戦争と平和」について、子どもの主体性を尊重しつつ、行動に結びつけて学ぶことを目標とする「総合的な学習」に取り組む意義は大きいと言える。

※＜3つの宝物＞
子どもたちが
修学旅行で見つけた宝物

- 資料館の夏服の穴
- 禎子さんが折った小さな折り鶴
- 南側がこげていたアオギリ
- 被爆したアオギリ2世
- 大きな折り鶴は力強い
- 8時15分でとまった時計
- 原爆ドームは以外に大きく、ぼろぼろではなかった
- 韓国人被爆者慰霊碑は朝鮮半島の方向を向いている
- 平和の火は世界から核兵器がなくなるまで消えないで燃え続ける
- 公園内にいた人から被爆体験を聞く

Actibity（活動） 2
Discussion（討論）

「夏服の少女たち」ビデオ鑑賞
↓
ビデオの感想交流

絵本から「はだしのゲン」や「広島カープ物語」などの漫画読み物まで、たくさんの種類の本があったので、自分の読みたい本を選び、とても熱心に読んでいた。インターネットでは、原爆や戦争に限らず、広島から連想するもの、例えば広島焼きや紅葉まんじゅう、広島カープなど、幅広く調べていて、広島のイメージが広がった。

子どもたちが考えた2つの立場
〔保存賛成派の立場〕原爆ドームを保存することで、後世に原爆の恐ろしさや戦争の悲惨さを伝えることができる。広島に原爆が落とされたことが忘れ去られてはならない。
〔保存反対派の立場〕原爆ドームを残すと、被爆した人や、原爆で家族を亡くした人などが原爆を思いだし、つらい思いをする。

Special thanks to
太田剛さん（編集工学研究所）
箕面市の地域IT活用型事業に取り組む学校として豊川南小は名乗りを上げた。編集ワークショップ～Edit Tableの使い方講習～編集作業といった一連のカリキュラムのコーディネート役として来ていただいたのが太田さんです。

Input（情
Discussi

国語教材「平和

広島キーワー
広島を調べる
編集ワークシ

広島の3つの
（自分のテー

ちがう視点で

一つの課題には複
在する。「自分の考
がう立場の人はど
で自分をふり返る。

＜広島修学旅行
クラスごとの碑めく
ランティアの方に公
体験談を交えて案

「ジンギ」なき、かけっこ

かわのひでただ

夏休みがおわって、つけもの石のように重かった宿題と、みんながサヨナラした、ある朝。キラキラ太陽は、まだまだ夏の顔をしていますが、ほっぺをすべる風には、秋のにおいが色づいています。

集団登校のこどもたち。

「オハヨー、シンちゃん。学校に行く時間だよー。いっしょに行こうよー。今日も学校に行かないのー。」

シンちゃんのお母さん。

「ゴメンねー。シンすけは、今日もおなかがいたいって、おフトンから出てこないのよ。学校におくれるから、みんな先に行っててねー。ホント、どうしたかしらねえ。夏休みがおわっても、おなかがいたいだの、あたまがいたいだのって、なんのかんのいって学校に行かないんだから。もう10日にもなっちゃうじゃないの。シンすけーっ、おきなさい。学校に行く時間だよーっ。朝ゴハンも食べてないでしょ。わたしのそだて方が悪かったのかしらん。」

シンちゃん。

「・・・・・・・。」

こどもたちが、学校に行ってしまったシンちゃんちの前は、急にしずかになって、庭の木のかげがアスファルトにクッキリ。

夏休みがおわっても、シンちゃんが学校に行かないのは、ナニかとくべつなワケでもあるのでしょうか。そのワケは、お母さんにも、先生にも、ともだちにも、サッパリわかりません。そして、なによりも、シンちゃんにもわからないのです。

おフトンのなかで、シンちゃんは、

「学校に行く時間だってわかってるよ。でもほんとうにおなかがいたいんだよ。夏休みの宿題、たくさんやりのこしたから、あたまがいたいって休んだんだ。それから、いたい、いたいって休んでたら、三日前から、学校に行く時間になると、ほんとうにおなかがいたくなってくるんだ。どうして、いたくなるんだろうなあ。ボクが、ズルするからいけないんだよなあ。」

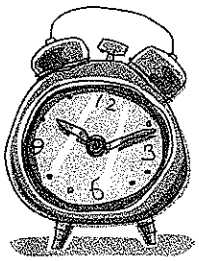
と、ブツクサ。

学校の先生からの電話。

「とってもしんぱいなことですねえ。シンちゃんが学校にこないことで、お母さんには、こころあたりがありませんかねえ。新しい学期になって、シンちゃんひとりがきていないんですよ。みんなしんぱいしてるんですがねえ。ぜひ、学校にこさせてくださいね。」

シンちゃんのお母さん。

「ごしんぱいをおかけしてもうしわけありません。明日、ひっぱってでも学校につれて行きますから・・・。」



次の朝の空は、ふかい青の色。いつものようにこどもたちが学校に行ってしまってから、シンちゃんは、むりやりお母さんにおこされて、ひっぱられるように、学校の門のところまでやってきました。

シンちゃんのお母さん。

「おなかがいたい、いたいって、ウソでしょ。学校に行くのがイヤでウソをついているんじゃないの。お母さんは、ウソつきをそだてたおぼえはないよ。サア、ここからひとりで学校に行きなさい。みんな行っているんだから、シンすけも行けるハズよ。」

と、すこしかなしそうに、すこしおこってそうに、シンちゃんのせなかをおしました。シンちゃん、

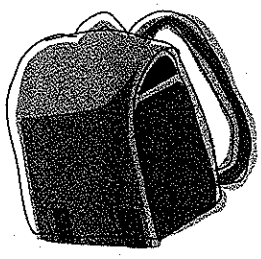
「さいしょは、ズルだったけどさあ。ほんとうにおなかがいたいんだよお。今だっていたいんだ。がまんしてるんだよお。教室に行ってもさあ、先生やともだちに、どんな顔をして、どんなコトを話せばいいんだよ。ボクにもボクのともだちづきあいとか、『ジンギ』ってものがあるんだ。みんな、ボクのことをどう思っているんかなあ。ア、イタタタターッ。おなかがいたいよお。」

そんなことで、シンちゃんとお母さんが、校門でモタモタしています。

そのときです。とつぜん教室のほうから、シンちゃんと同じクラスの「しょうがいじ」といわれている、タクちゃんが、校庭の光りのなかへかけこんできました。かろやかな足音です。そのあとからドタドタと、タクちゃんをおっかけてきた先生が、タクちゃんのせなかへ、

「そんなに教室にいるのがイヤなら、いつもにげ出すんなら、もう明日から学校にこなくてもいいぞーっ。」

と、ことばをなげつけました。いちどは、そのことばにたちどまったタクちゃんでしたが、校門のところにいるシンちゃんを見つけると、タッタッター、ビューッとシンちゃんにかけより、ニコニコしながらシンちゃんの手をにぎりました。そして、シンちゃんをひっぱるようにして、校門のそとへとかけ出したのです。シンちゃんはタクちゃんにひっぱられるまま、かけ出します。せなかのカバンが、ガチャガチャガチャと、歌をうたい出しました。



タクちゃんをおっかけてきた先生も、シンちゃんのお母さんも、小さくなっていく、ふたりのせなかをポカーンとながめるばかりです。

シンちゃん。

「タクちゃんは、いつも学校をとび出して、どこにいくんだろう。どこでもいいんかなあ。ナニ考えてるんかな。まあいいや、いっしょに、かけて行ったらわかるかもしれないな。アレレ、おなかがいたくなくなってるぞ。へんだなあ。」

タクちゃん。

「ニコニコ、ニコニコ、ニコニコ。」

秋のにおいがチョッピリする風が、かけて行くふたりをつつみます。ふたりのはなにあせの玉。

さあて、それからどうなったのかな。シンちゃんのともだちへの「ジンギ」は。学校に行きなさいということばは。こなくていいということばは。

みんなではなしあうヒント

- シンちゃんが学校に行かないのは、お母さんが悪いのかな。シンちゃんがいけないのかな。シンちゃんのお父さんは、どう思っているのかな。
- あなたは、学校がスキですか？　キライですか？
- シンちゃんとタクちゃんは、何年生かなあ？いつもなかよしなんかなあ？

「フレンズ」訪問&インタビュー

今回は、「行けるなら学校に行きたいけれど、今は…」という小・中学生のための適応指導教室「フレンズ」を訪問し、担当の中村指導主事、木戸教諭からお話を聞きました。また、過去に「フレンズ」を担当された竹綱教諭、水野教諭、亀田教諭から当時のお話等を聞きました。

中村指導衛主事と木戸智子教諭にインタビュー

フレンズは、平日の火曜日から金曜日の午前10時から午後3時まで、らいとぴあ21の2階の2室「学習室」と「相談室」がおもな活動場所

・10人前後の小・中学生の子どもたちが、午前中は学習タイムとし、学習室を基本にプリント学習や自分の課題を行い、午後からは創作・身体を動かすタイムとし、絵を描いたり野球・バスケット・卓球等のスポーツをしています。

フレンズ担当教諭1名と教育センターの担当指導主事、教育相談員、有償ボランティアスタッフ（大学卒業生）がかかわっている

・子どもたちが自ら考え行動できるよう無理じいせずにサポートするということで、子どもたちの相談にのったり、学習の支援をしたりしています。また、学校復帰への取り組みの一つとして、始業式に付き添い登校等も実施しています。

・定期的に、子どもたちの保護者や学校の担任等と連絡をとり合い連携し、話し合う場をもっています。

・保護者等の要請により、フレンズに来ているいないにかかわらず家庭訪問も実施しています。

フレンズに来ている子どもたちは、箕面市内全域の中学校区から徒歩・自転車・バス等で通学

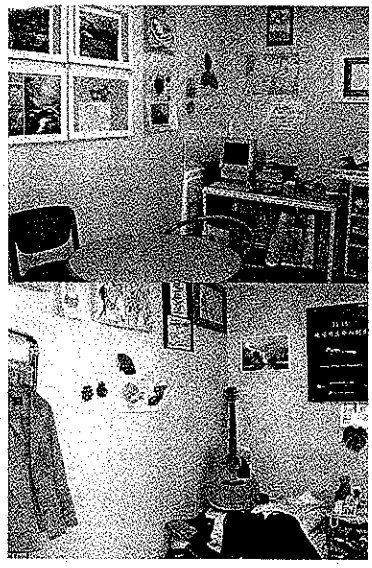
・一人ひとりフレンズに来るようになった事情はまちまちですが、言葉に対して敏感な子どもたちが多いです。

・大勢のなかではうまく自分を表現できなかった子どもたちが、フレンズの小集団の中でぶつかり合いながらも人間関係や距離の取り方がわかり、自分のしたいこと、自分ができることを見出し、自分の居場所を見つけ、安心と自信を取り戻していっています。

竹綱珠衣教諭（現在：第二中学校で美術担当）にインタビュー

箕面市で適応指導教室としてフレンズが開設された当初の平成8（1996）・9（1997）年度の2年間を担当しました。

当時は、フレンズに10人程度の子どもたちが来ており、年齢も小学生から中学生と幅広く、興味関心が違うなかでの活動は個々ばらばらで、きちんとしたカリキュラムの無い状態でした。子どもたちのことを知るために、子どもたち一人ひとりとじっくり語り合う時間を大切にし、信頼関係をつくり上げていく中で、午前中をみんなで活動（学習）する時間、午後から個人の時間というように方向性を見出していきました。



フレンズの当面の目標は、学校復帰

たとえ復帰できなくても、それで自分の存在価値を見失うのではなく、社会で生き抜く力を蓄えてくれることが根本的な目標だと思います。子どもたちはじっくり話を聞いてくれることで安心し、自分の明日を考えることができ、学校との協力の中で、高校・大学へと進学した人もいます。

本来もっていたはずの力を取り戻すには時間と場所と理解が必要

中学校卒業後、フレンズに相談はあっても通うことができず、長期化した人の中には、その立て直しに時間がかかっている人がいます。中学を出たとたん孤立してしまうことが多いからかもしれません。

小さな部分にばかり目を奪われず、大きな視点から部分を見ることが大事

人は、表現に対する意欲を10歳の頃を境になくすといわれています。その年頃は、客観性が目覚めるとても大切な時期です。表現意欲をなくした子には多くの表現方法を、生きる力をなくした子には多くの生き方を、両者共通するものを私は感じています。

●水野洋子教諭（現在：第四中学校で保健体育担当）にインタビュー

平成10（1998）・11（1999）年度の2年間を担当しました。

フレンズには、小学3年生から中学3年生の10人程度の子どもたちが来ていました。中学生の人数が多かったので、自然に中学生が小学生の学習を見たり、話し相手になったりする場面が見られました。

「フレンズに来ると、ハッピーホルモンが出る」

その当時フレンズに来ている子どもたちは、行けるものなら学校に行きたい子どもたちが多いので、本人の意思を大事にしながら行ける方法を探っていました。ハッピーホルモンというエネルギーをためて学校にいく子もいました。

自分たちで企画したり、考えたりしたフレンズでの経験が生きる

中学卒業後、一人の子の呼びかけがきっかけで、ペットトリマーとして就職した子やアルバイトしている子、会計専門学校に通っている子たち4人が集まって同窓会を持ちました。メールを通して連絡をとり、つながりを持つことができました。

フレンズの子どもたちの抱えていることは、どの子どもにもあり得る

フレンズ担当を経験する前の私は、どちらかというと元気で話かけてくる生徒に目が行きがちでした。経験してからは、自分の目線から遠かった生徒のことが、より気にかかるようになり自分から声をかけるようになりました。ただ同じことを体験しても、一人ひとりのとらえ方には違いがあるので、信頼関係をつくって対応していくとともに、一人で抱え込まないように、保健の先生や他の先生たちとも子どもたちのことを話する機会をもっています。

●亀田眞莉子教諭（現在：第六中学校で美術担当）にインタビュー

平成12年度（2000）から14（2002）年度の3年間を担当しました。

不登校の悩みをかかえた子どもたちと出会えた日々

わずか3年間ではありましたが、私にとっては新たな学びの年月であったと言えます。いつも子どもと向き合う時、相手が何を欲しているのか、その願いに耳を傾けること。そしてその願いに対してどんな支援ができるかをしっかりと考え、互いの目標設定ができたら焦らずに人間関係を築いていく他ありません。

週に一度の支援対策会議

現在、六中では、今年度から生徒指導部の分掌の中に不登校生への支援対策部会というのが立ち上げられています。不登校生への多面的な支援のあり方を探っていくことや、その生徒の担任をされている先生に対しても、どういった支援ができるのかを状況に応じて検討しています。言うまでもないことですが、スクールカウンセラーの先生やスクールサポーターの方たちとの連携を図りながら、時には外部の相談機関のお力添えもいただくなど、色々な方策がとられています。

登校できるようになるには「元気」を取り戻す為の資源探しが優先される

ところで、学校現場にいる教師は休んでいる子どもたちにややもすると登校してほしいと願うばかりに子どもに大きな負荷を与えてしまっていることがあるようです。それは、「どうしたら登校できるようになるのだろうか。」といった悩みに教師自身が縛られてしまい、その事がやはり子どもには伝わってしまうようです。私自身、常々肝に銘じていることは、どんな時も決して焦らず子どもの持つエネルギーを信じて待つこと。そして子どもと同じ目線で語れる謙虚な大人であるよう、自己点検を怠ってはいけないと言うことでしょうか。

訪問・インタビューの感想

「自分らしく生きたい」を応援する教育

人権教育推進会議委員　服部ひとみ

不登校の子どもたちの思いを理解し肯定的に捉えておられる先生方から、彼らのことを聞くうちに、不思議な感動を覚えた。学校という社会に対して扉を閉ざした彼らの心に、ふつふつと沸き立つ熱い力を感じたからだ。その力とは「自分らしく生きたい」という情熱なのだと思う。しかし社会の中にその場所が見つからないもどかしさ。多様性を標榜しながら実は異質のものを認めない社会で、彼らは必死の思いで自分にふさわしい着地点を模索しているのだろう。

せめて教育の場は、すべての心を包み込む大らかな場所であってほしい。教育の力で彼らの情熱をしっかり未来につなげてあげたい。人権教育にあたっては人の心の傷みに感じ思いやりをもって行動できる人間を育てたい。また心理面に限らず、諸般の事情で学校に来られない子を視野の外に置かない人権教育でなければならない。

「安心できる」人間関係を子どもたちに

人権教育推進会議委員　平沢清美

箕面市の適応指導教室「フレンズ」で指導にあたられている先生方からお話を聞く機会を得て、「不登校」についていろいろ考えさせられました。どの先生も「不登校」といってもひとくくりにできない個々の事情があるとおっしゃいましたが、私は、学校に行けない・行かない子どもたちは「他人との関係」がうまく調整できないことが、彼らの心の中で大きな原因となっていると思いました。他人とは、学校で関わる先生・友だちであったり、家庭で関わる親・兄弟であったり様々ですが、その人たちと安心して関われなくなると、自分にも自信を失ってしまう、そういう「不安」を心に宿してしまったのだと思います。「不登校」のラベルを貼られた子どもも、今学校に通っている子どもも「同じ」だとおっしゃった先生の言葉は、ストレスの溜まる現代社会の中で、感受性の高い子どもたちは、大人が思うより以上に、みんな「不安感」を抱いているのではないかと気づかせてくれました。増えつづける不登校の子どもたちを守るには、私たち大人が学力保障よりももっと基本的なスキルとして「安心できる」人間関係を子どもたちに保障し、それらが彼らにとって利益であることを伝えていくことからしか始まらないと思います。「フレンズ」で子どもたちと関わった先生方は、それぞれ試行錯誤される日々の中で、子どもたちとの「距離」を見つけられたのではないかと思います。

お話を伺って、人数のことや学力保障のことなど原学級では困難な条件もあるでしょうが、「フレンズ」でなくてもどの学級でも、どの先生でも、そのお互いを尊重しあう適切な「距離」を作っていくことができるとおっしゃった自信を、私は心強く受け止めました。このエールをもっと多くの先生方や保護者の方たちに広げていってほしいと思います。

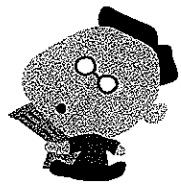
自発的行動を促すキーワード
（フレンズに来ているいないにかかわらず）

＊安心できる居場所であること
＊無理強いをしないこと
＊じっくり語り合える時間（原因究明より未来への展望）をとること
＊信頼関係をつくること
＊人間関係の距離をうまくとること

なべちゃんのおサルでもわかる

『人権教育基本方針』

世界の人々とともに人権を！～2004年は人権教育のための国連10年最終年です～



第1章第1節　「人類社会のすべての構成員の固有の尊厳と平等で譲ることのできない権利とを承認することは、世界における自由、正義及び平和の基礎である。」（『世界人権宣言』）

早いもので、2003年も暮れようとしています。早いと言えば、21世紀に入って早くも3年が過ぎようとしています。2001年宇宙の旅どころか、地球上では戦争やテロリズムで相変わらず人間同士が武器で殺し合っています。「2001年宇宙の旅」という映画を撮ったキューブリック監督は、その冒頭の場面で縄張りを争って殺し合う類人猿の姿を描いています。彼は人間の科学技術がいかに進歩しようとも、その攻撃的な習性は変わることがないことを象徴的に示しました。

命を奪い合っても自分の利益にしがみつくという行為は、科学技術の力では決して克服することはできません。人間が自分を抑制することを可能とする唯一の道具が、文化であるのです。人権という概念も、国際連合という団体も、そして世界人権宣言や日本国憲法という法律も、すべては人間が自分自身を治めるために作り出してきた文化です。

箕面市人権教育基本方針は、国連、世界人権宣言及び憲法を尊重することを明記しています。これは、これらの団体や法律が絶対だということを意味しているのではありません。団体も法律も、未来において変わっていくことでしょう。私たちの人権教育基本方針が大切にするのは、平和と人権の社会を作り出す文化の力なのです。

最近、自動車レースで大けがを負ったレーサーが、「どんな事故があっても、それが主催者の落ち度によるものであっても、決して主催者の責任を問わない」という契約が違法だとして訴えていた裁判で勝ったというニュースがありました。第2次世界大戦のさなかに、日本の「ゼロ戦」という戦闘機はたいへん性能が高く、アメリカ軍はたいへん困ったそうです。そこでその秘密を探ろうとゼロ戦を分解して、たいへん驚いたそうです。それは、ゼロ戦にはパイロットを銃弾から守る鉄板がまったくつけられていなかったからです。だから軽くて性能が良かったのです。戦闘機の性能を上げることよりもまずパイロットの命が大切という文化が日本にはなかったのです。レースをおもしろくするよりもまずドライバーの命が大切という文化は、現代の日本においてもなかったと言わねばなりません。人の命を優先する文化を、国連は人権文化と呼んでいます。

国連はこの10年間、人権文化を地球上のすべての人が共有できるようにするために、「人権教育のための国連10年」というプロジェクトに取り組んできました。2004年はその最終年にあたります。私たちは箕面の地で、人類社会の一員として何ができたのでしょうか。みなさん一人ひとりが、一度ふりかえってみていただきたいと思うのです。あなたの家庭で、あなたの学校で、あなたの職場で、あなたの町で、人権文化は高まったでしょうか。そしてまだ改善できることがあるならば、未来に向かって、勇気を持って一歩を踏み出していただきたいと思います。

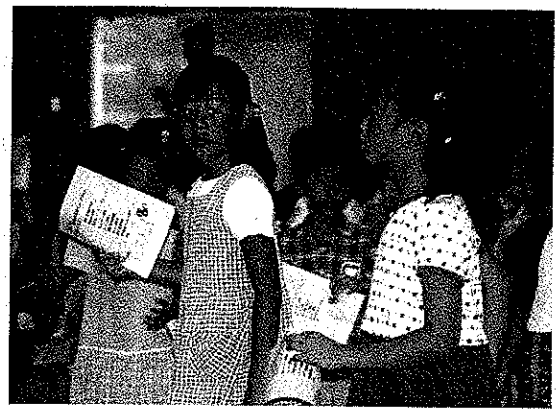
（鍋島祥郎なべしまよしろう 大阪市立大学人権問題研究センター助教授）

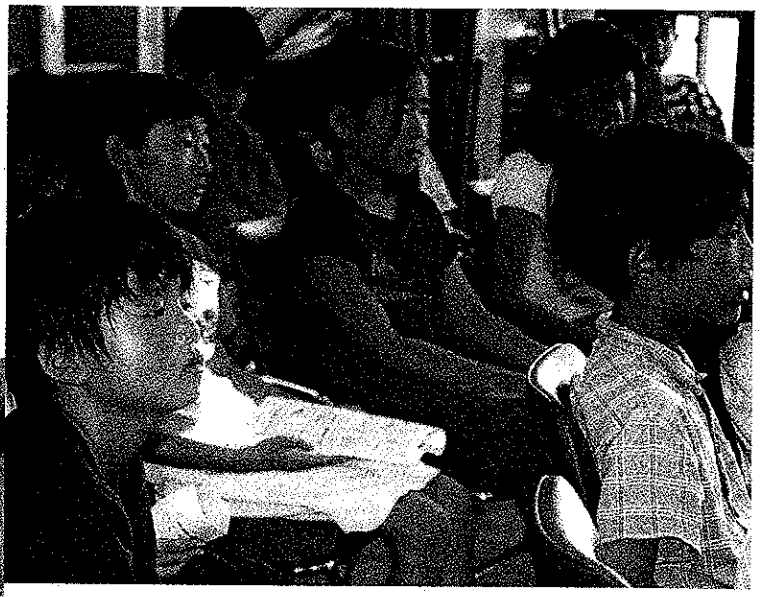
人権教育推進会議情報誌『はじける　こころ』
発行　箕面市人権教育推進会議
箕面市教育委員会
教育企画課　TEL072-724-6762 FAX072-724-6010
e-mail:edukikaku@maple.city.minoh.lg.jp
平成15年（2003年）12月

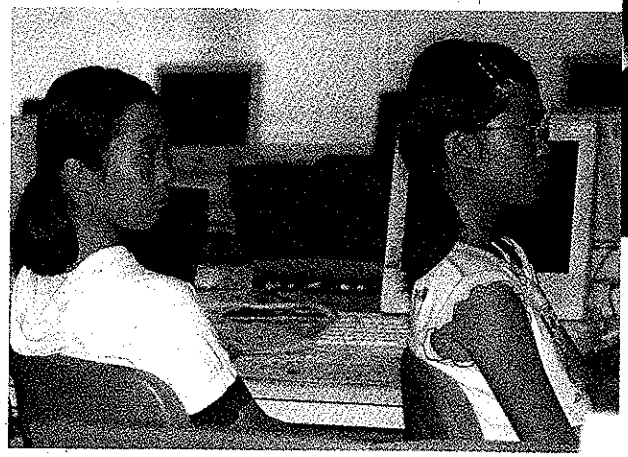
人権教育推進会議委員
鍋島祥郎、服部ひとみ、埋橋淑子、平沢清美、河野秀忠、丸岡康一、永田よう子、山口ひとみ、鷲見孝子、高桂子、山下延治、西岡貴子、中田和成、青木修一、山田佳彦、寺元耕二、川上加津子、鶴丸春吉、仲野公、藤原秀子、上西利之、井上隆志、中野仁司、赤川隆洋、南橋正博、南悦司、津田善寿、石田宇佐美、前田功、辻広志、中井正美、谷口あや子、藤野美代子、坂上潔司

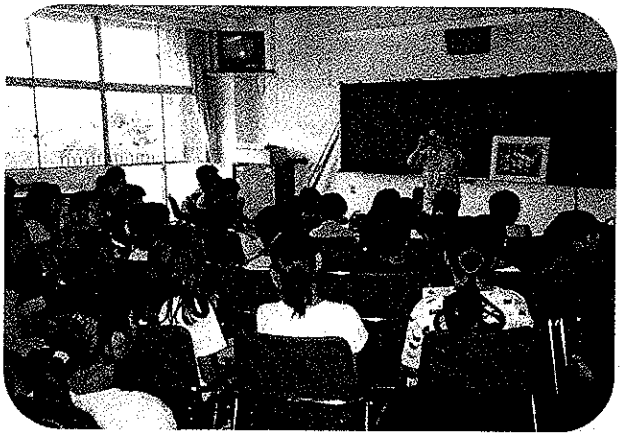
げんげのページ

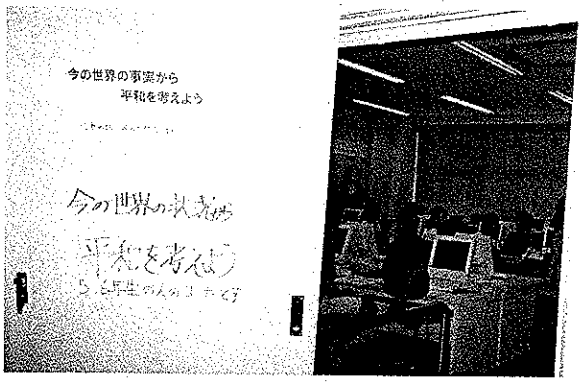
げんげの：「げんげ(紫雪草)」とは、れんげ草のことで、「げんげの」は、れんげ草が一面に生い茂る野原のことです。れんげ草は、茎が地に臥して広がり、春になると蓮の花に似た小花を一面に咲かせます。また、れんげ草は、緑肥として大地を肥やします。蓮に似た小さなれんげ草を、子ども一人ひとりの尊厳に見立てて、それが一面に花開く様子をイメージしました。











写真募集！

子どもたちの笑顔、真剣な顔、輝く顔…などの写真をお送りください。

正誤表

	誤		正
P11	中村指導衛主事	→	中村衛指導主事
P 8	以外	→	意外